

公開討論会「パラスポーツの未来を考える」の概要

日時：平成 28 年 12 月 18 日（土）

会場：滋賀県立男女共同参画センター大ホール

◆コーディネーター

永浜 明子 氏（立命館大学スポーツ健康科学部 准教授）

◆パネリスト

木村 敬一 氏（パラリンピック競泳 銀メダリスト、しがスポーツ大使）

北田 千尋 氏（車いすバスケットボール 女子日本代表選手、しがスポーツ大使）

高橋 明 氏（大阪体育大学・芦屋大学 客員教授）

山本 博一 氏（滋賀県スポーツ推進委員協議会 会長）

永浜	<p>パラスポーツの由来について</p> <p>◆「障害者スポーツ」という聞きなれた言葉から、「パラスポーツ」に表現が変わってきているように思いますが、「パラスポーツ」の言葉の意味、歴史的な背景について、高橋先生、教えていただけますか。</p>
高橋	<p>◆パラスポーツという言葉は、日本では、東京のオリンピック・パラリンピックが決まった 2013 年ぐらいから使い出しており、簡単に言うと「もう 1 つのスポーツ」という意味になります。</p> <p>◆国際的には 2001 年に北京での開催が決定された時、オリンピック組織委員会とパラリンピック組織委員会と一緒に運営することも決められ、その頃から「パラスポーツ」が使われるようになりました。それまでは各々に工夫するという意味の「アダプテッドスポーツ」という言い方が広まっていた。</p> <p>◆障害者のスポーツは大きな戦争とともに発展してきました。戦争で傷ついた人たちのリハビリにスポーツを取り入れようということから始まりました。イギリスのストーク・マンデビル病院で脊髄損傷センターが設立され、神経外科医であったグッドマン博士がリハビリの成果を競うフェスティバルを始めました。そして、海外からも参加者が訪れるようになって、国際ストーク・マンデビル大会となりました。これがパラリンピックの原点になります。</p> <p>◆この「パラリンピック」という言葉は日本人がつけたということをご存知ですか。1964 年、東京でオリンピックがありました。その直後に、第 13 回国際ストーク・マンデビル大会が行われた際に、日本人が「パラリンピック」という愛称をつけました。なぜ、「パラリンピック」になったかという、この国際ストーク・マンデビル大会は車いす競技大会で、いわゆる脊髄損傷者がほとんどでした。この脊髄損傷を「パラプレジア」といい、オリンピックと組合せて「パラリンピック」となりました。</p> <p>◆その後、使われなくなったのですが、1988 年のソウル大会で「パラリンピック」という言葉を復活させました。ただ、東京大会から 24 年経っていますから、車いすの選手だけではなく、視覚障害や機能障害など様々な障害の選手が出場できるようになっていて、「パラプレジア≒車いす」のオリンピックが通用しなくなりました。そんな中、なぜ「パラリンピ</p>

	<p>ック」が使われるようになったかという点、記録も参加国もオリンピック並みになってきていて「もう1つのオリンピック」、「パラレル」+「オリンピック」で「パラリンピック」と呼ぶようになりました。それが定着し、翌年、国際パラリンピック委員会が設立され、徐々に競技スポーツになってきました。そして、パラリンピックからパラスポーツと呼ばれるようになったと考えています。</p> <p>◆今もいろんなところで戦争をしています、戦争で傷ついた人たちがメダルを獲ることも多いのです。4年後の東京は、戦争と平和を考える良い機会になるのではないかなと思います。</p>
永浜	<p>パラスポーツとの出会いについて</p> <p>◆1988年にソウル大会でもう一度「パラリンピック」という言葉が出てきたようなのですが、まだ、木村さんも、北田さんも生まれていないですね。最初に紹介がありましたが、お二人にそれぞれの障害と競技の出会いについてお話していただけますか。木村さんからお願いします。</p>
木村	<p>◆私が水泳を始めたのは、10歳の時です。もともと体を動かすのが好きな子どもで、飛んだり跳ねたり、自転車に乗ったり、スキーをしたりしていたのですけれども、2歳の時には全盲になっていて、激しく運動することによって転んだり、あちこちにぶつかったりして怪我の多い子どもだったと聞いています。そこで、母親がどうすれば安全に、目いっぱい体を動かすことができるかなと考えて、プールの中だったら大人の方もいますし、どこかへ行ってしまってもいいし、それほど危ないこともないかなということで、近くのスイミングスクールに入れてくれたのが始まりでした。</p>
北田	<p>◆私は木村選手とは対照的に、幼少期はスポーツの経験が全くなく、生まれた時に足に異常があったのですが、重度の喘息があり、ほとんど病院で過ごしていました。小学校に入った時点で周りに誰も友達がない、スポーツもしたことがないという、すごく引っ込み思案な幼少期でした。</p> <p>◆中学校に入って、たまたまバスケットに誘われて、その頃、喘息が重いのは知っていましたが、足の障害がそんなに重いことは知らされていなかったもので、体育もできることはしていたので、自分が障害者に含まれるということは意識していませんでした。誘われたのでバスケットをやってみようと思ったのですが、みんなができる練習を私は出来なかったりして、自分の足はまわりの友達と違うことに気づきました。</p> <p>◆中学の3年間はバスケット部にいたのですが、試合に出ても1分も走ることができず、高校生になる時に、私はバスケットが出来ない体なんだと受け入れてしまって、バスケットのない高校に進学しました。そうでないと、バスケットをあきらめきれないなと思ったからです。それでもやっぱり、バスケットが好きで、バスケットに関わりたいと思い、高校にバスケット部を作りました。自分は選手として出来ないで、初心者を教えながら、私がいた3年間は公式戦にも出ました。その経験もあって、教員になれば自分がバスケットに関わっていけるのではないかなと思い、教員免許を取るために、体育学部がある大学に進学しました。</p> <p>◆大学2年生の時に、インターンシップで障害者スポーツセンターに行った時、たまたま、</p>

	<p>初代日本代表の方が臨時職員として働いていらっしゃって、その方に自分のことを話したところ、「車イスに乗れば今でもバスケができるよ。」と、その場で車イスに乗せてくれました。そして、チーム練習にも参加させていただいたことが競技を始めるきっかけです。</p> <p>「みんなと同じように思い切りコートを走りたい」という気持ちがずっとあったのですが、それは自分にはできないと思っていた。ところが、車いすに乗れば走れる、自由にどこでも行くことができるということが魅力的だったので、どんどんのめり込んでいきました。</p>
永浜	<p>◆木村さん、お母様が「囲まれているプールだったら安全だろう」ということがきっかけとのことですが、その時の印象は覚えていますか。一般のスイミングスクールに行ったのでしょうか。</p>
木村	<p>◆一般のスイミングスクールに入れていただきまして、今から考えるとすごく運が良かったなと思えるのですが、一般のスイミングスクールやスポーツクラブは色々な理由で、障害を持った子どもの受け入れを拒否されることが多いと聞きます。私が最初に母と尋ねたスイミングスクールは、幸運にも承諾をしてくださいます。他の子どもたちと同じレッスンで先生が1人に対し、子ども10人くらいで進んでいくのですが、僕の入ったクラスは先生がもう1人ついてくださって、それは、僕がプールサイドを歩く時の安全の確保ですとか、見えなくて人のまねができないのでその動きを直接水の中で教えてくれるというように、レッスンを進めてくださって、こんな恵まれたところに最初に巡り合えたことはラッキーだったなと思っています。</p>
永浜	<p>◆私も水泳が専門なのですが、障害のあるお子様は、今でも受け入れが難しい現状があります。その素晴らしいスイミングスクールの名前を公表してください。</p>
木村	<p>◆今は「彦根スイミング」と言いますが、僕がいた時には、「彦根シーマックス」という名前でした。</p>
	<p>地域での取組について</p>
永浜	<p>◆先覚的な、本当に素敵なスイミングスクールだと思います。</p> <p>◆それでは、パラスポーツの現状について、野洲地域の活動、野洲地域がどういう状況になっているのかを、山本さんお話しいただけますでしょうか。</p>
山本	<p>◆地域の障害者スポーツですけれども、まず障害の程度や種類によって施設が対応できるかどうか、非常に大きな課題になっております。例えば、車イスのスポーツが使える体育館がまだ少ないと聞いておりますし、対応できる限られた施設で練習していると聞いております。野洲は総合体育館が車イス使用できますので、車いすバドミントンや車いすバスケの大会を行っております。</p> <p>◆また、平成19年に障害のある子どもや大人がスポーツを楽しめる施設、一緒に交流を図れる施設の「なかよし交流館」ができました。そこで色々な障害のある方と一緒にスポーツを楽しむ、そしてまた、メンタルの面でもリラックス効果のあるスノーブレン室とか、感覚統合室というものも併設しておりますので、そこで交流を図るといった恵まれた環境であ</p>

	<p>ることは確かです。その一方で、障害のある方がスポーツするにあたってはやはり、それを支える、指導したりするようなボランティアの人たちがまだまだ不足している状況です。</p> <p>◆スポーツ推進委員の活動を紹介します。新しいスポーツ体験のイベントとして「ニュースポーツバイキング」というものを、6年前から毎年野洲の体育館で開催しています。目的は市民の皆様にもいろいろなスポーツを体験していただき、日頃の生活の中でスポーツを取り入れていただくということを目的に開催しております。健常者も障害者も来ていただいて体験していただくのですけれども、障害のある方もできるものとして、ボッチャ、アキュラシー、ラダーゲッター、カラーリングなど、多数のメニューをそろえております。</p> <p>◆滋賀県では、総合型地域スポーツクラブが全部で55あります。その中でも「YASUほほえみクラブ」は、障害者スポーツに積極的に取り組んでいるクラブです。その中心となっているのがスポーツ推進委員です。その活動の一つが今回で4回目になるのですが、「障がい者駅伝大会（びわこ若鮎駅伝大会）」があります。このような大会は全国でも初めての試みではないかと思えます。滋賀県の盲学校・特別支援学校の選手など、32チーム200人が参加されました。男子の部・女子の部・混合の部・一般の部があります。競技の後は、交流を図るなど楽しい場となっております。開催の目的は、練習をしても披露する場がない中、その成果を発揮してもらうことと、障害者スポーツが広く理解されて交流が深まることによって、障害者のある方が積極的に社会に参加できる機会を促進することです。</p> <p>◆もう1つ、障害者のスポーツカーニバルの「野洲の風に集う」を「なかよし交流館」がオープンしたことがきっかけで毎年開催しております。自己PR形式で行っておりまして、社会福祉協議会・障害者関係団体・特別支援学校などから何回も参加していただき、マラソンをした後、ニュースポーツで交流を図っています。そこでの経験がきっかけで競技を始め、アスリートとして成長されている方もいます。</p> <p>◆また、県のスポーツ推進委員560人が、障害者スポーツを理解するため実技研修を2回実施しました。シッティングバレーボール、風船バレーボール、ボッチャ、車いすバスケットボール、車いすバドミントン、ゴールボールです。コーチに、以前パラリンピアンで活躍された選手や、ボッチャで東京パラリンピックを目指している選手、車いすバスケットボールチームのレイク滋賀の方々に指導していただきました。実際やってみると競技の難しさ、楽しさ、競技を行う時にどのようなサポートがいるのかを、少し吸収できたのではないかと考えております。このような取組を行っております。</p>
永浜	<p>◆今、お話しいただいたスポーツを体験する「スポーツバイキング」や「スポーツカーニバル」で、障害のある方とない方がどうやって一緒にスポーツを楽しんでいくために、どのような取組・工夫をされていますか。</p>
山本	<p>◆10年くらい前から積極的にパラスポーツの推進をやっているのですけれども、最初はどういった対応をしたらいいか、なかなかわからない所がありました。私どもの方から、積極的に障害というものを理解して日頃から接していると、スポーツと一緒に楽しめるという雰囲気になってきますし、相手の方も心を開いていただけるという、地道な結果だと思えます。交流館があることも、その後押しになっていると思えます。関係者団体、障害者協会や行政など、一緒に活動していくことが重要だと思います。</p>

日本と海外との違いについて	
永浜	◆次は海外の方に目を向けたいと思います。私が大学院を出た25年前は「アダプテッドスポーツ」いう分野を日本で学べる所がなかったのでアメリカに渡りましたが、その頃とは状況が変わっているかと思えます。木村さん、北田さんに、試合・練習や遠征に行かれた時に日本と海外でどのような違いを実感されましたか。
木村	◆一番感じていることは、海外だと選手がスーパースターとして取り上げられているなどいうことを感じています。パラリンピックくらいの大きな大会になりますと、どこの国でも多くのお客さんが詰めかけまして、各国様々な応援を繰り広げていますが、世界選手権や、それほど知られないような大会でも多くのお客さんが入っていたりするなど感じています。 ◆特に、昨年スコットランドのグラスゴーの世界選手権に出場したのですが、有料でチケットを販売しており、イギリスのスーパースターを応援しようと、お客さんもたくさん入っていました。ホテルでも、「今日は世界選手権を見に来たんだ。」と言っているお客さんがいたと聞きました。大会そのものというよりは、戦っている選手を見に来たという感覚で盛り上がっている感じがしました。
北田	◆私は去年の4月から8月までオーストラリアのリーグでプレーしていました。そこで感じたことは、オーストラリアのリーグはホーム制とアウェー制があるんですが、ホームゲームの時には、全日本選手権でも入らないくらいすごい人数のお客さんが来てくれて、スポーツを楽しむという感覚で、私たちの競技を見てくれていることが驚きでした。 ◆ファイナルラウンドで優勝をかけた試合に向かう空港内でお客さんから「今日からファイナル。がんばれ！」と声をかけていただき、本当に地域に根差したチームとしてみんなが応援してくれているという感じでした。これは日本に全くない環境だなと思いましたし、これから日本もそうになっていけばいいなと思います。
永浜	◆少し、国民性というお話が出たと思うのですが、そのこと以外に違う所があれば教えてください。例えば、スポンサーがつく、つかないは大きな問題ですよ。 ◆私もアメリカにいた時に、車いすのテニスプレイヤーの方たちはほとんどスポンサーがついていて、ユニフォームも何もかも、企業の名前が入っている状態でした。また、私のゼミの学生がレイク滋賀に魅せられて、(アメリカの)車いすバスケットを見たいと1年間留学してしまいました。小さな大学なのですが、車いすバスケットのイベントをすると300人近い人が体育館に押し寄せるといった違いに驚いて帰ってきました。国民性とは違う観点で、他にも思い当たることがあればお話ししていただけますか。
木村	◆スポンサーがつく選手ってどんな選手かなと思うと、強い選手だと思います。パラスポーツに限らず、強い選手でないとお客さんも呼べないし、知名度もなかなか上がってこないしスポンサーがつかない。日本人選手にスポンサーが付きにくいのは、世界に比べて圧倒的な強さが不足しているのではないかと感じています。例えば、日本人のパラリンピック選手の中で一番有名なのは国枝慎吾選手だと思うのですが、彼ぐらい強くなればちゃんとスポンサーがついているので、制度がどうこうよりも自分たち選手が強くなれば

	<p>と思います。</p>
北田	<p>◆私は国民性の違いというより、根本的に文化の違いだと思います。スポーツを楽しむ文化、日本人は楽しみ方が下手だと思います。東京オリンピック・パラリンピックが決まってから、メディアで取り上げられることも多いし、野球やサッカーをみなさん見られると思うのですが、私は根本的な文化、歴史があると感じます。もちろん日本人の良さもあります。</p>
高橋	<p>◆みなさんは、障害者スポーツが特別なものと考えられている方が多いです。だから、「もう一つのスポーツ」という言い方をするのですけれども、もともとスポーツというのは、年齢、体格、体力、性別、技術でルールを工夫してやっています。よく、子どもたちに「バレーボールのネットは、どうして小学生と中学生で高さが違うの?」と聞くのですが、子どもたちは「背の高さが違うから」と答えます。背の高さが違うというのは1つの不便さですね。背が高いと高い所に届く、低いと届かないという不便さがあります。逆に低い方が有利な場合もあります。みんなが持っている身体的な特徴で、それぞれ不便さが違うのです。そんな中で「そこをこうすれば同じスポーツができる」という中でみんなスポーツを楽しんでいるのですね。日本はどうしても特別なスポーツや、リハビリテーションの延長だと思っていた方が多いのです。そうではなく、今は障害者のためのスポーツではなしに一緒に楽しめるスポーツという捉え方で障害者スポーツが発展していくことが、木村選手が言われたことにつながっていくのではないかと思います。</p> <p>◆あと、文化の違いもあります。日本はちょっとしたことで上靴を持ってきなさい、車いすで行ったらタイヤを拭いてくださいと言われる。畳の所や、自由に使えない所もある。最近は公共施設なども、バリアフリーになりつつありますが、まだなかなか障害のある方と接する機会が少ないので、障害のある方がスポーツをしていると、つい、障害のほうに目が行ってしまふ。そうではなくに、ちょっとした工夫でこんなにスポーツができるという能力を見て欲しい、そういったことがこれから4年間で、東京に向かって盛り上がっていき、障害者スポーツがレガシーとして、大会後も続いていくことにつながると思っています。</p>
永浜	<p>ありがとうございます。木村さんと北田さんが言われたように、楽しみ方、スポーツの見方が本当に違うのかなと。留学から帰って来た学生が、障害者スポーツを「障害のある方のスポーツとして見ていない、ひとつのスポーツとして興奮しながら見ている。その姿が違う。」と話していたことが一致するなあ、とお聞きしていました。</p>
永浜	<p>パラスポーツの魅力、課題について</p> <p>◆次は、「スポーツの魅力、パラスポーツの魅力、課題」を皆さんの視点からお話いただきたいと思います。「こんな魅力があるんだ」とか、「もっと普及していくための課題」など、引き続き高橋先生からお願いします。</p>
高橋	<p>◆障害者スポーツはまず、可能性に目を向けるということが大事だと思います。パラリンピック発祥の地のロンドンでさえ、4年前のパラリンピックの際、「可能性に目を向けよう」</p>

をテーマに掲げたことで、ロンドン市民たちがオリンピックと同じエリートスポーツだと認め出して、障害者の雇用にもつながったと聞いています。我々もつい、障害のほうに目がいくのは事実ですが、「何ができないではなく、何ができるかということに目を向けるところが、障害者スポーツの一番大切なことではないかと思います。パラリンピックの原点をつくったグッドマン博士の「失った機能を数えるな。残ったものを最大限に生かせ。」これが原点であって、その可能性を我々が認めることによって、障害者の雇用、最終的な自立につながればいいのではないかと思います。

◆先ほど控室でも話をしていたのですが、オリンピックは障害のある人でも出られることはご存知ですよね。リオオリンピックでも車イスのアーチェリーの選手が出ていました。また、福原愛選手とポーランドの片腕のない選手も試合をしていました。オリンピックは昔から障害のある選手も出られるのです。冬のオリンピックではスノーボードで中学生の選手が銀メダルを取りました。ロンドンでは馬術の法華津選手が出られました。彼は72歳でした。オリンピックは、子どもから高齢者まで、そして障害のある人も出られる大会なのです。

◆パラリンピックは視覚障害者の伴走や自転車競技のタンデム以外は、障害がない人は出られないのです。そこが大きな違いです。また、パラリンピックには聴覚障害者は出ていません。聴覚障害者はデフリンピックという形の4年に1回の大会が開催されています。皆さんにパラリンピックでは是非、人間の可能性を見ていただきたい。また、パラリンピックは車イスや、義足、義手、杖など、補装具を使う場合が多いので、そちらにも目を向けていただきたい。例えば片足が義足の選手より、100m走に関しては、両足が義足の選手のほうが速いのです。そのようなところも興味深い部分であります。

永浜

◆義足の話が出たところでありますが、今日は義足を持ってきていただいておりますので、簡単にご説明をお願いします。

高橋

◆（義足を見せながら）これが競走用の義足です。膝から下につけます。これは、航空機やロケットにも使われているカーボンでできています。これが片足で80万円から100万円くらいします。1つでは足りませんし、トレーニングなどで筋肉が付くとサイズも変わって取り付け部分（ソケット）が合わなくなってくるので、すぐ作り変えたりします。また、自分の筋力に合わせてカーボンの強さも変えていかなければならないので、かなりのお金がかかる世界です。

◆先ほどの話になりますが、両足義足で走った100m走の記録は、10秒57です。ボルトの世界記録は9秒58ですので0.99秒しか違いません。逆に、片足だけで走り高跳びで192cm跳ぶ選手がいます。彼は、ケンケンして跳ぶのです。走り高跳びは、両足での踏切はフェールになります。その選手は、「おれは生まれながらの片足だから、両足で踏み切ってはいけないというルールに違反していない。」と、一般の試合に出ています。残ったものを最大限に生かすと、こんな可能性もあるんですね。

◆障害がある人には、福祉のため1級から6級までの障害者手帳があります。1級、2級は両足がない人。片足の人は3級です。障害の程度は、片足より両足がない人のほうが重いのですが、陸上の世界では両足がない人のほうが速いのです。そして、車いすマラソンの42.195kmの記録は1時間20分14秒です。足で走るマラソンより40分速い。ですが、そ

	<p>んな素晴らしい人でも大きな段差があると前に進めない、それがハンディキャップなんです。そこを工夫することによって同じスポーツができるね、という環境を整え、スポーツを楽しむことが大事かなと思います。</p>
永浜	<p>◆木村選手と北田選手に伺います。小さな時からスポーツを行っている、今実際行っている中で、ご自身、あるいは周りで起こっていること、困っていること、パラスポーツの魅力や課題に触れていただけますか。</p>
木村	<p>◆魅力に関しては、高橋先生が全部お話してくださいまして、僕はもう何も話すことがないくらいです。やっぱり能力に目を向けていくというのは、すごく面白いと思います。「失ったものを数えるな」とグッドマン博士がおっしゃったと言われてはいますが、本当に残された機能を存分に生かすことで、これだけのパフォーマンスができるということ、これだけ速くなり、強くなるのを示していけることがパラスポーツの魅力のひとつかと思っています。</p> <p>◆課題として普段感じていることは、これだけ競技レベルが上がってきている中で、今、指導者の問題がすごく出てきていると思います。私たちが競技している水泳は、健常者と変わらないトレーニングをすればいいのですが、それぞれの障害に応じた問題が出てくるかと思っています。健常者のトップのコーチが必ずしも障害のある選手のことをわかっているわけではありませんし、障害のある人に詳しい先生方が水泳のこと、競泳のことに詳しいわけではありません。そういった両面の先生方の知識を結集しなくては、競技レベルが年々向上している世界で、なかなか戦っていけないと思っております。残念ながら両面をしっかりと理解した先生方は、そんなに多くはいらっしゃいませんので、今は指導者と巡り合える問題、選手と指導者がお互い力を付けていくという問題が難しいところなのかなと思っています。</p>
北田	<p>◆私は施設面の課題をすごく感じていて、車いすを体育館で使わせていただくとブレーキ痕がついたりするのですが、それを嫌がられて使わせてもらえなかったりとか、筋力アップのため、一般のスポーツジムに入会しようとしても、「車いすは危ないので、認めていません。」と断られたりします。私自身は、車いすが危ないというよりは、知ろうとせず突っぱねられることが課題だと思っています。</p> <p>◆多くの方が、障害は遠い世界のことと考えておられますが、今はそうでなくてもある日、自分自身や家族が障害を持つ可能性もあります。そんな遠い世界のことではない、「障害は身近にある」と考えることが、知ろうとすることにつながるのではないかなと思っています。</p>
永浜	<p>◆ありがとうございます。以前伺いました、北田さんが選手確保のためにあちこち回っているお話を是非お願いします。</p>
北田	<p>◆私がやっているバスケットは、団体競技なので人がいないとチームが組めず試合にも出られません。常に選手確保に動いています。具体的には、脊椎などに障害を持つことになった、リハビリをしている患者さんに直接声を掛けさせていただいています。ただ、最近はそういった障害者の方が減ってしまっています。それは、きちんとリハビリをしないで自</p>

<p>永浜</p>	<p>立生活を送れないままで、病院から自宅に帰されてしまい、自分の可能性にも気づけずに閉じこもってしまう方が増えているからだと思います。自宅に訪問はできないので、病院と連携していくことも障害者スポーツを盛り上げるためには、必要なことではないかと思っています。</p> <p>◆車いすスポーツをされる方が減ってきている背景のひとつに、飲酒運転の取締り強化や車の性能向上で交通事故が減ってきているということがあり、とてもいいことだという一面と、車いすの団体スポーツにとっては選手の確保が難しくなっている一面があるということについて、とてもインパクトがあるお話だったのでお願いしました。</p> <p>◆山本さん、地域の活動の中で（障害者スポーツを）普及させていくために、課題となっていることをお話していただけますか。</p>
<p>山本</p>	<p>◆障害者の方がスポーツをする実施率（週1回以上）は約13%、健常者の方は約40%で、約3分の1です。どうやったら普及するのかを考えた時に必要なものは、人・施設・資金・情報です。</p> <p>◆人と組織については、まず各市町にはスポーツ推進委員がおります。あと、県内55カ所の総合型地域スポーツクラブがありますので、そこが中心になって行政や福祉団体、障害者スポーツ協会、特別支援学校、体育協会、大学、ボランティア団体などと連携、協力していくことが必要です。特にスポーツをささえるボランティアがまだまだ不足しておりますし、そのためには、障害者スポーツ指導員という資格を多くの方に取っていただいて、サポートする組織づくりがまだまだこれから必要じゃないかと思っております。</p> <p>◆次に、施設のことですが、先ほどから触れられていますようにまだまだ障害ある方が安心してできるような施設がない、また、断られるということがあるようですので、そういったところをもっと改善して、誰でも使える施設を増やすことが大切だ」と考えております。</p> <p>◆また、資金面も、いろんな大会をするにあたって心配があります。用品も高価なものが多く、商店や企業やライオンズクラブなどの団体などに協賛・スポンサーになっていただいたり、イベントに参加いただけると一番いいなと思っております。</p> <p>◆最後に、情報ネットワーク。これが非常に重要ですね。滋賀県障害者スポーツ推進事業実行委員会という組織があり、私もそのメンバーなのですが、実際、情報の一元化がされていない状況です。一番いいのは誰にでも簡単にわかりやすくまとめた情報網ですが、問い合わせ先を案内してくれる窓口なども必要だと思います。</p> <p>金銭的サポートについて</p>
<p>永浜</p>	<p>◆最後にお話された情報の一元化ということが、大きな課題になってきますので、このことについてお話を伺えればと思います。</p> <p>◆少し金銭面のお話も出ましたので、木村さんと北田さんの状況をお話したいと思っています。先日、リオパラリンピアン近藤寛子さんとお話させていただいたのですが、42.195km 走る中で伴走者が2人必要なのに1人分しか遠征費が出ないそうです。リオまで行くというのに、もう1人分は完全な持ち出しで、コーチのお金も全て持ち出しされており、なかなか生活が苦しいとおっしゃっていました。</p> <p>◆北田さんは、車いすも高価なものだと思いますし、遠征費も必要ですよ。木村さんはサ</p>

<p>木村</p>	<p>ポートの方が付いた方がいいでしょうし、そういったところからでもお話いただけますか。</p> <p>◆障害を持っている以上、1人では限界が出て来てしまうので、いろいろな方にサポートしていただくのは仕方のないことなのかなと思っています。リオで戦うにあたって、泳ぐのは僕ひとりですけれども、コーチやタッパー（ターンする手前をタッピング棒で選手に知らせる係）2人、トレーナー、栄養士、個人的な活動を支えてくれるマネージャーなど、ほぼチーム体制で、多くの方に関わっていただきました。この方たちの生活の保障にも、当然お金が必要です。人を確保することにかかってくる費用は、高みを目指せば目指すほど、上がっていきってしまうと思っています。</p> <p>◆私はこの4年間は企業からサポートをしていただくことができましたので、なんとかやりくりできたのかなと思っているのですが、ロンドンパラリンピックでメダルを獲ることができたことで、このような環境を提供していただけたのであって、強くなってからやっと保証されたというのがあります。でも、本来サポートが一番必要なのは強くなる前であると思うので、そこまでがまだまだ不十分なところを感じています。</p>
<p>北田</p>	<p>◆私も感じることは同じなのですが、車いすバスケットボールの場合、日常用とは別に競技用の車イスが必要になります。これはたいへん高価なもので、軽自動車を買えそうなくらいの値段です。タイヤなどの消耗品もたくさん必要です。私もこの4月からは企業のサポートをしていただいて競技ができていたのですが、ロンドンからリオ予選までの4年間は一般企業に就職してフルタイムで働きながら、競技していました。その企業からも少し、お金の面でのサポートはいただいていたのですが、日本代表強化合宿や海外遠征、自分の生活などしていくと、車いすの整備品などは高くてなかなか買えないので、常に安い物を探して買っていました。それでも海外遠征費が払えない時があり、両親に借りることもありました。木村選手も言われているように、結果を出すまでの過程でサポートがどうしても必要なのですが、それをしていただくのが難しい現状はあります。</p>
<p>永浜</p>	<p>滋賀での国体・全国障害者スポーツ大会に期待すること</p> <p>◆今後は、2020年のパラリンピック、2024年は滋賀で国体・全国障害者スポーツ大会、2021年は関西ワールドマスターズなど、大きなスポーツイベントが控えています。このようなイベントが、あるひとつの契機になって状況が変わっていくと思うのですが、これから期待されることを皆さん、お話ししていただけますか。</p>
<p>高橋</p>	<p>◆木村選手と北田選手がお金の話をされましたが、マイナー競技にはなかなかお金がつかないのです。全国で木村選手のような全盲の水泳選手の人数は二桁です。北田選手のやっている車いすバスケットは男女合わせて700～800人くらいです。そして、先ほどの話のように選手が本当に少なくなっています。その中で、何億という税金が動くわけです。</p> <p>◆先ほど、国枝選手の名前が出ましたが、錦織選手の活躍でテニスの人気が出てきたことが、車いすテニスにクローズアップされている原因ではないかと思います。また、企業が各競技団体にスポンサーにつくのは、社会的責任・社会貢献の一環が多いです。実際、我々（障害者スポーツ）の世界はマイナーで、広告を出そうとしてもなかなかうまくいかないことが多いです。また、障害者雇用推進法に基づいて雇っているところもあるのです。</p>

	<p>が、逃げ道（雇うべき障害者の人数×毎月5万円の納付金）もあり、そういうことを含めて、整備していく必要があると思います。</p> <p>◆私は、元マラソンランナーの有森裕子さんと一緒に会社をやっているのですが、彼女が現役の時、アマチュアからプロになりました。その頃は、陸上競技のプロはほとんどいなかったのですが最近は徐々に増えてきており、時代の流れかなと思います。このことはパラスポーツの方にも広がっていくかなと思っています。</p> <p>◆障害者スポーツはまず、見るのが大切だと思います。日本では98%の国民がパラリンピックを知っているそうです。ただ、52年前からパラリンピックという名前はありますが、実際に生で、パラスポーツの競技や試合を観戦したことがある人は本当に少ないです。</p> <p>◆河合純一さん（日本パラリンピアンズ協会の会長）は、2つの想像力（思いめぐらす想像力、創意工夫する想像力）で障害をマイナスと捉えずにプラスと捉えることと、「逆転の発想」が大事だと、よく言われます。それを4年後のオリンピック・パラリンピック、8年後の滋賀県の国体・全国障害者スポーツ大会を通して、しっかりと見ていただいて知っていただくことが大事で、知っていただくためのイベントの企画も必要だと思います。</p>
山本	<p>◆4年後、8年後に向けて、日本、滋賀県はますます盛り上がっていくことと思います。障害者スポーツに関しては、見たり、体験したり、サポートしたりすることで、スポーツを理解するのはもちろんですが、障害者の方たちとつながりが深まり、お互いの理解もできると思います。</p> <p>◆先ほどの話と同じく、8年後の大会を成功させるためには、人、組織・施設と、資金、ネットワークの構築と充実が大変重要になると思います。今後、関係する企業や団体、県民、市民、皆さんにパートナーとなっていただいでやっていくことを期待いたしますし、私もそのために、まだまだ活動していきます。障害のあるなしに関わらず、ともにスポーツを楽しむなど、共存する社会になるよう進めていきたいと考えております。</p>
北田	<p>◆障害者スポーツでも、代表としてやっている方や、趣味としてやっている方など、いろんな競技レベルがあります。私は、パラリンピックでメダルを獲るために人生をかけて競技しているのと同時に人生をかけて楽しんでます。皆さんがスポーツイベントに来場され、観戦される時は、第一に楽しんで欲しいと思います。選手とともに、みんなで楽しんで欲しいという気持ちが大きいです。</p>
木村	<p>◆先ほど北田選手から、障害のある方が家に引きこもってしまって選手が増えないとお聞きしましたが、障害者イベントへの参加が外に出る機会となって、スポーツを通して社会とつながるきっかけづくりになっていくと思います。そうすることで自然と障害のある人たちが社会に出られるようになり、その人たちと一般の人たちが関わるのが、最終的には、障害者理解のきっかけになればいいなと願っています。</p>
永浜	<p>質疑応答</p> <p>◆ここで皆さまからご質問いただき、それを膨らませてお話しいただきたいと思います。どのような質問でもかまいませんので、この機会にぜひ、ご質問ください。</p>

質問者①	◆パラリンピックは装具を付けて競技を行うところが、オリンピックと違うと思うのですが、例えば、選手が足りない時など、健常者が車イスに乗ってバスケットをしたり、アイマスクをして水泳をしたりすることができれば、一緒にスポーツを楽しめることになると思うのですが、いかがでしょうか。
北田	◆車イスバスケットボールの場合、車いすに乗ることで健常者も一緒に競技することができます。女子の全日本選手権でも健常者をOKにしようと、変わってきています。その場合、身体レベルに応じてクラス分けをします。クラス分けをする理由は、練習ではどうにもできない部分をカバーするためのシステムです。 ◆健常者は一番高い持ち点で4.5点、私も同じ点数です。これによって、車いすプレーヤーと一緒に試合ができます。現在、6校ほどの大学（信州大学や北里大学など）に車いすバスケットボールサークルがあり、全日本大学選手権を開催しています。
高橋	◆クラス分けについて補足しますと、胸から下の部分が麻痺して腹筋・背筋が使えない方は、持ち点1点です。1チームの持ち点は、5人で14点まで。5人とも4.5点の選手が入ると持ち点オーバーになります。このルールによって、様々な身体レベルの選手とチームが組めます。 ◆私がシドニーパラリンピックでコーチをやっていた15～16年前は、「なぜ、私たちの大切な車いすを遊び道具に使うの」という壁もありました。今は、「健常者も座れば同じスポーツを楽しめる」が通じる時代になってきました。一緒にできるスポーツという理念が変わってきていますので、そういうことをみんなが知っていただければ障害者理解につながるのでは、と思います。まずは、触れ合うことが大事です。
永浜	◆木村さん、アイマスクをされて泳いでいるという方は、いらっしゃいますか。
木村	◆僕たちのクラスでは見えないということが大前提になっておりますので、そういったルールはなく、全く目が見えない選手としか試合はしていません。ただ、同じ条件にして一緒に泳ぐということは可能だと思いますし、そうすることによって、私たちと同じ世界を感じていただけるのでは、と思ったりします。 ◆ただ、ご質問をされた方がもしオリンピックに出られるくらい泳ぐのが速かったとしたら、わざわざアイマスクをされてパラリンピックを目指すのかなと、ちょっと疑問に思いました。
永浜	◆少し補足をしていただきたいのですが、車いすバスケットボールで健常者が入ったチームは、パラリンピックは無理とのことですが、どのあたりの試合まで出ることはできますか。
北田	◆これは国によって違うのですが、海外では健常者が正式に国のリーグに入ることは認められています。日本も全日本はOKにしようという動きがあります。それには、競技人数が減ってきて、障害者だけでは成り立っていないという背景もあります。
高橋	◆今は、東京オリンピック・パラリンピックに向かって、みんなに競技を知ってもらいたい

	<p>うことで、組織委員会が主催するパラスポーツの体験学習（アイマスクを付けたり、車いすに乗ったりしての競技体験）を、全国各地に選手を派遣するなどして、行うようになってきています。</p>
質問者②	<p>◆なかよし交流館の職員です。メディアの利用の方法について、みなさんはどのように考えていらっしゃいますか。このことは、金銭面や未来の見通しと関連すると思います。「競技を見てもらって」ということが先ほどの話の中にありましたが、啓蒙・啓発の部分で非常に大きいのではないのでしょうか。</p>
高橋	<p>◆メディアの種類として、新聞・テレビなどがありますが、こまめに情報を提供することで地域の新聞が取り上げてくれることが多いです。小さなイベントや大会でも、興味を持っていただければ取材に来てくれる可能性が出るので、発信することは重要です。</p> <p>◆テレビはNHK以外の民放だと、15分程度の番組でも莫大なお金がかかるので、スポンサーが居ないと難しいです。いかに企業に協賛していただけるかが、大事だと思います。</p> <p>◆また、東京パラリンピックは子どもたちに是非見てもらいたい。夏休み中の8月25日に始まりますが、なかなか子どもたちは自主的には見ない。私自身、中学時代に東京オリンピックを学校の授業の一環で見っていました。夏休みの終了を早めたりして、学校の教育の中で観てもらおう機会をつくることも、国の働きかけとして必要ではないかと思います。そのようなことも含めて、情報を発信することは大事だと思っています。</p>
北田	<p>◆最近、やっと私たちの活動がスポーツ欄で取り上げられるようになりました。今までは福祉欄ばかりだったので、スポーツとして見てもらえるようになったことは大きいです。</p>
高橋	<p>◆もちろん、スポーツ欄で取り上げられることもいいのですが、スポーツ欄を読むときは、自分が好きな競技や、チームの記事だけをピックアップされることが多いと思います。社会面はまんべんなく読まれ、福祉欄は社会面の中に載りますので、記事の内容によってどちらの面に載せていただくかを、マスコミの皆様も考えて扱っていただけると、より発展していけると思います。</p>
山本	<p>◆昨日の京都新聞に、北田さんが大きく載っていらしたのを、見られた方はいらっしゃいますか。また、最近はゴールボールの西村選手も載っていました。障害者スポーツ大会に向けて、色々な方が、メディアに取り上げられるのは大変うれしいことです。発信している内容をメディアの方に取り上げてもらえるようにアピールすることは、我々の重要な役割です。</p>
木村	<p>◆スポーツ欄で取り上げていただくとか、スポーツ選手として取り上げていただくとか、とても大切なことなのですが、海外のように選手をスターとして作り上げていく、プロモーションしていくことも、応援していただける方を増やすことにつながっていくと思います。オリンピック選手はCMや様々な番組に出演したりしていますが、これからはパラスポーツの選手の中でそのような選手が現れたら面白いと思いますし、普段スポーツを見ない方でも、こんなスポーツがあるんだと関心を持っていただけたらいいなと思います。</p>

永浜	<p>◆私からも補足をさせていただきます。知的障害や精神に障害のある方は、報道、特に顔写真とセットでの報道は敬遠されることが多いです。写真1枚を撮ること、あるいはそれをどこかに載せるということは、なかなかクリアできない壁になっています。障害と一口にいても、障害の種類で異なるメディアの扱われ方に対する選手やご家族の意向もかなり異なってくるということを、付け加えさせていただきたいと思います。</p>
質問者③	<p>◆質問ではなく、今日の感想なのですが、私は昔から車いすマラソンに参加させていただいており、アスリートにはなれなかったのですが、スポーツを通して社会参加することは当事者として意義があることでした。今日は私たちの活動のチラシも配っていただいているのですが、少しでも知っていただくための活動をしていくことが大事だと、この講演を通じて改めて思いました。</p>
質問者④	<p>◆カヌーのスポーツドクターをしております。カヌーはパラとしても普通のスポーツとしてもマイナーですが、今年はリオで羽根田選手が初のオリンピックメダルを獲り、テレビでも取り上げられました。障害者カヌーは競技人口が少ないため、すぐにでも大会に出られる選手になれる可能性があります。パラスポーツはこのようなところも広めていけば、競技人口を増やすきっかけになるのではと思います。</p> <p>◆また、障害者のひきこもりの件ですが、関節リュウマチの患者さんも治療に時間がかかるため、ひきこもりになりがちです。私もスポーツ推進委員の一人なのですが、障害者駅伝には感動しました。このようなイベントなどはひきこもりの方が外に出るきっかけにもなるとは思いますが、その窓口がどこか、みなさんなかなかわからない状況です。これからの国体・全スポに向けてもう一度、アピールをお願いします。</p> <p>◆木村選手、北田選手の後輩など、後に続こうという選手は出てきていますか。</p>
木村	<p>◆今のところ、私の後に続く選手は出てきていないです。それは、選手の発掘ができていないことと、指導者の問題が大きいと思います。私は滋賀県内の盲学校を卒業しましたが、公立の学校であれば先生の異動があり、いつも視覚障害者スポーツの指導に特化した先生がいてくれる状況とは限らないことも、問題の一つだと思います。</p> <p>◆進学した東京の中学校では、長年パラスポーツに関わっているたくさんの指導者に恵まれて、パラリンピックまで行くことができました。全国の選手の発掘と指導者の育成がこれからの課題だと思っています。</p>
北田	<p>◆私も後継者はいないです。日本代表の中で、自分の障害のクラスでは私が一番若く(27歳)今は、後に続く選手がいない状態です。やはり人数が減っており、私は100年後は団体競技の障害者スポーツはなくなっていると思っています。それは、事故の減少や医療の進歩に加えて、脊髄を損傷された方がロボットなどを活用して歩けるようになったり、また、義手や義足に関しては、普通の手足と変わりなく動くようになり、障害者スポーツという概念そのものが、なくなっているかもしれないからです。</p>
山本	<p>◆障害者駅伝は、今年で4回目です。対象は養護学校の生徒や作業所で働いている方たちで</p>

	<p>す。目の不自由な方は、まだ参加されたことはありません。去年は、岐阜県から参加いただき、大変良いということで、今年から岐阜県でも開催されることになりました。うれしいことにどんどん広がっていている状況です。</p> <p>◆あと、窓口とのことですが、県の障害者スポーツ推進事業実行委員会での課題の一つになっています。障害のある方がスポーツ関連のことで問い合わせをしたい時など、窓口の周知をする方法としては、各市町の福祉担当課への問い合わせが一番いいのだろかなと思います。ただ、全県分はなかなか把握できないので、県と連携するネットワークが一番大切だと思います。これはまだ十分構築できていないので、これらの構築が今後の活動で大切になってきます。</p>
<p>質問者⑤</p>	<p>◆私は、シッティングバレーのサポートをしています。今日の講演で、どの種目も同じような課題があり、また大変な御尽力をされているということがわかりました。今後、国体と全国障害者スポーツ大会が開かれますが、「全国障害者スポーツ大会で、シッティングバレーは開催されるのかな」と思いました。大会には、障害者じゃないと出場できないと思うのですが、もしも、健常者を入れてのチームでも可能になれば、滋賀でもシッティングバレーの試合ができるようになると思います。</p> <p>◆滋賀県は、バレーボールはなかなか熱心な県だと思っているので、普通のバレーができなくても、何らかの形で続けたいと思っている方はいらっしゃると思います。シッティングバレーをやりたいと思ってくれた人が、滋賀県で競技できる環境になるといいので、発言させていただきました。</p>
<p>永浜</p>	<p>◆たしかに滋賀県で開催はするのですが、競技種目の設定については、開催県には権限がありません。日本障がい者スポーツ協会とのすり合わせで、進めていくことになっています。</p> <p>◆県の要望として挙げることはできても、最終的には県の判断では決定できないのです。ただ、声が挙がらない限り、そのような要望があることもわからないので、ぜひ、要望を出していただけたらと思います。</p> <p>◆今回の講演会のまとめとして、まず、パラスポーツの今までの長い歴史を簡単に教えていただきました。また、パラスポーツを取り巻く現状を日本、海外で活躍されている現役選手のお二人に、困りごとや日本と海外のスポーツに対する見方の違いをお伺いできました。山本さんには、滋賀県でのパラスポーツはどういう現状があり、どういった活動がされているのかを伺いました。高橋先生からは可能性に目を向けることの大事さを、パラスポーツが持っている可能性についてお話を伺えたと思います。</p> <p>◆是非、「見ることから始めていただきたい」というお話があったように、お帰りになられてから御家族や友人、知人の皆様にこの講演会の内容を1人でも多くの方にお話をいただければと思います。皆様がお話していただけることがたくさんの方に広まって行って、見る人や、聴く人が増えていくのではないかと考えております。これを機会にたくさんの方に広めていただけたらと思います。</p> <p>◆今日は長時間ありがとうございました。</p>